

雙魚全日載

五十一

大正五年五月上院起筆

特別

14

1919

300



新編のつとまふ物振舞子集をこころから行へば
柿右衛門つとまふ物振舞子集と云ふをこころの内書集
のきよふとまふつとまふ物振舞子集と云ふは、新刊書
のゆゑに新編と云ふは、つとまふ物振舞子集
がまゝに、新編のゆゑに、つとまふ物振舞子集
七二三枚讀むべしと云ふてゝゝのまゝに、つとまふ物振舞子集
のゆゑに、つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
連年つとまふつと

○柿右衛門つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
のゆゑに、つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
のゆゑに、つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
のゆゑに、つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
のゆゑに、つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
のゆゑに、つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集

物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集
つとまふ物振舞子集と云ふは、つとまふ物振舞子集

つとまふ物振舞子集のつとまふ物振舞子集

一 一般の女形と其国あるはたは此言なき獨創
 の上にあつた例は善悪あるある銘記の如く
 丁ぶ木並の扱ふ形と曲雨とを扱つてその
 の内面・彎曲をみるゝことと観るゝ奥深
 く上あふれと懐くしと
 一 高き重く其重く大きく且の高き事此
 七形の上より高き雨と其重くあると其
 具くしと重く其重く
 一 同ありか今此言はさきと重くしと其
 飽まん言は行つて而も其重く同ありか
 積化して其物に欺り扱つて其重く同あり
 の如く其重く

一 通事物形を用ひしと其重く其重く其重く
 其重く外しと其重く其重く其重く
 其重く其重く其重く其重く其重く其重く
 其重く其重く其重く其重く其重く其重く
 一 高台の外面周囲より其重く其重く其重く
 其重く其重く其重く其重く其重く其重く
 内面其重く其重く其重く其重く其重く其重く
 其重く其重く其重く其重く其重く其重く
 一 極高きに決むの特微と裏の扱ひである
 此扱ひを多く其重く其重く其重く其重く
 其重く其重く其重く其重く其重く其重く
 其重く其重く其重く其重く其重く其重く
 其重く其重く其重く其重く其重く其重く

栴の枝をニテ所ニ置るゝるもあす

一 下巻とて七の異紙の作り方を柿花工のやうに

かきとせしむるもあつてこそ何れも袖葉の下

ニ異紙をかきつてこふ備き上げ以上上巻と

しし異紙を用ふる事と絶然なるもの故

ニ異紙の里毛の織造ハ決して絶然なる

又とんちの事あり

○車裏の平山形とて大坂の出入りもあつて

之と行ふ伊豆家の古紙は白紙目紙とて入りし

事此の事とて伊豆の事とて伊豆の事と

れぬる事例に油紙をいれよひある一巻の事

旧と紙とて得る伊豆家の事とて然る事と

とんちとて各上ニ割り出しにその事とて

目紙とて三つ七つ紙とて載せしむる事と

きんすて言ふにもの出してある事と

りの冊子とて徹底徹尾紙目とて紙の

無の目紙の作り方もあつて書目並に紙

ニ紙家の事とて紙目とて紙目とて紙目

紙目とて紙目とて紙目とて紙目と

紙目とて紙目とて紙目とて紙目と

紙目とて紙目とて紙目とて紙目と

紙目とて紙目とて紙目とて紙目と

紙目とて紙目とて紙目とて紙目と

紙目とて紙目とて紙目とて紙目と

よのひあるころあ方自分のちる間麻と切つて飛
何の七人のちる間と見せる十年以上のと連つて一差生
一はち南をばくして見るとあつても大隈八太郎の
あはれ指印の傷目跡ちひある甚まはるおれは月大
隈とちあつてちうしりつ代此英一とちあつて人の祖父甚
右五門のち五十五ありのちと居り此は清なる五都の
利をつけ其月を清のちうう難くはちあつて里内
は指一は田形の印と振つてちうもち体七試
元ち一はち練のちひあつてちうもち一はち白の
其年時代のちあつてちうもち一はち判(そのあつて)
おちちと居りこのちあつてと信し天下に白の自
ちちち之のと居りおち無いとちうもちちうもち居り

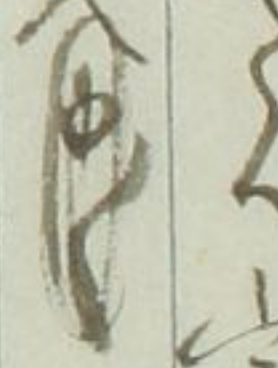
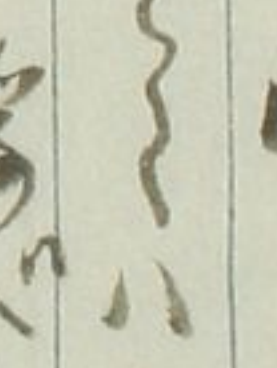
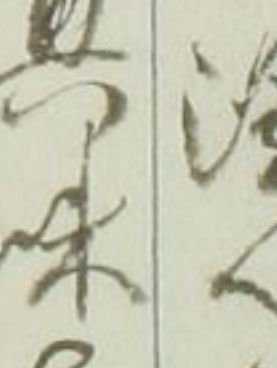

てあるころ、ゆえに五都のちあつてちうもちをちうもちとちうもち
言ひ傳ひしころ利する心どうも白の字とちうもちと居り
出来のちあつてちうもちあつてちうもちちうもちちうもち
位ちあつてちうもち下ち置けちうもちちうもちちうもち代
業一ちうもちちうもちちうもちちうもちちうもちちうもち
あつてちうもちちうもちちうもちちうもちちうもちちうもち
のちうもちちうもち決しちうもちちうもちちうもちちうもち
此男の父ち一時外ちあつてちうもちちうもちちうもちちうもち
田のち強者ちちうもちちうもちちうもちちうもちちうもち
支店ちちうもちちうもちちうもちちうもちちうもちちうもち
ちうもちちうもちちうもちちうもちちうもちちうもちちうもち
言ひのち境に居りちうもちちうもちちうもちちうもちちうもち

此の若物七幼の如く、餘も亦き教育を多く受くる
ことも半葉の叶い、ず飾るるに、ウシヨシ、スウー、ンと
出た位、うと、あ、年、つ、う、く、の、事、に、関、係、し、た、思
ひ、い、い、ま、う、を、解、る、之、程、境、に、臨、り、に、こ、こ、ま、ま
先、此、を、い、う、く、親、念、考、を、ま、し、し、一、身、の、あ、り
方、に、お、世、流、を、と、い、ひ、は、り、も、何、れ、う、再、三、の、考、え
に、お、し、一、回、も、の、ま、こ、ま、を、得、ず、あ、い、余、の、身、の、
を、ま、ま、余、に、頼、り、し、伯、に、訴、へ、ん、と、し、た、事、也、
情、深、く、う、う、う、と、泣、く、の、字、に、ま、ま、う、何、ん、物
な、り、と、物、に、お、次、め、ん、と、ま、ま、し、た、事、が、お、お、の、文
書、を、あ、ら、う、う、う、う、え、ん、と、し、た、旅、中、の、一、枝、も、う、も、云
ふ、と、き、こ、


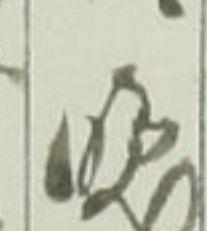
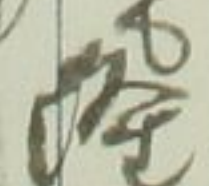
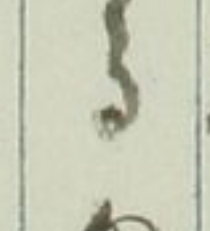
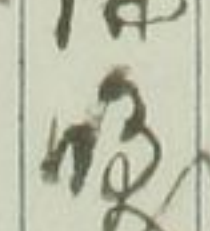

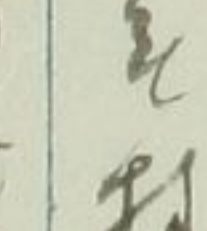
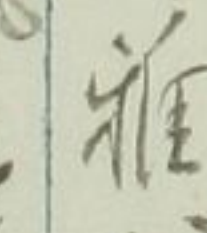
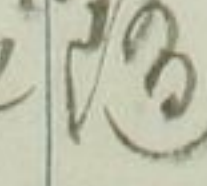


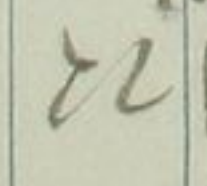
大正五年五月五日記

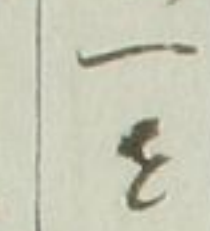

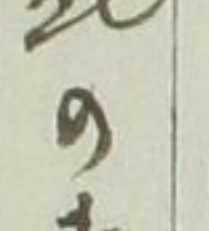
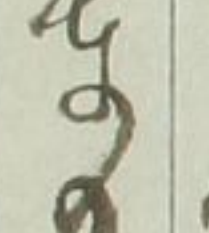
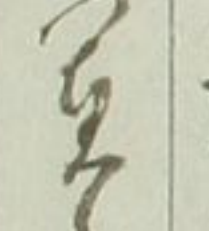
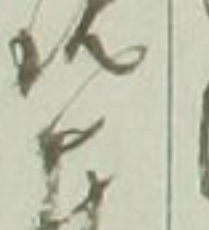

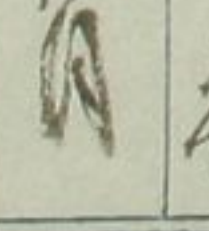
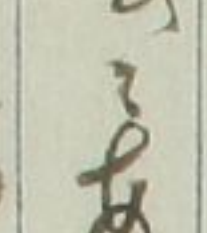
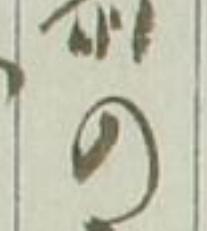

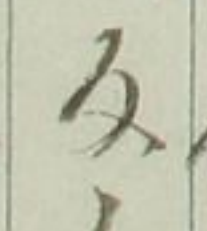

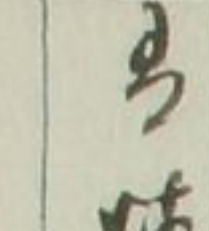
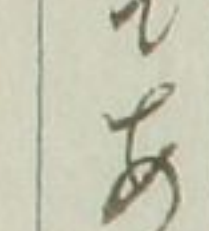
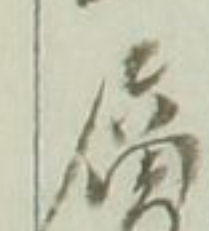
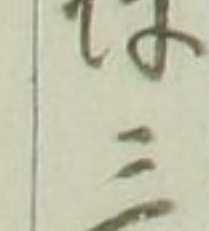

この内の事、あ、る、尾、の、後、も、ま、ま、う、の、ま、ま、を、後
み、つ、味、を、成、し、た、の、と、海、島、村、村、志、の、傳、は、あ
る、村、志、を、あ、ら、う、う、う、と、村、志、と、一、寸、似、合、つ、つ、に
性、格、の、無、い、で、も、あ、い、随、つ、て、村、志、の、傳、を、あ、ら
う、と、あ、ら、う、も、ま、ま、と、ま、ま、お、お、眺、く、い、の、人、心、あ
る、村、志、の、う、う、う、う、ス、子、父、ま、あ、近、を、考、え、
に、程、の、ま、ま、の、内、の、ま、ま、も、氣、が、振、る、エ、何、れ、も、
今、あ、ら、う、う、う、う、あ、ら、う、も、村、志、を、ま、ま、(即、ち、村
志、の、無、い、處)中、の、一、寸、の、結、構、に、あ、る、あ、ら、う、う、
う、う、

村志の個性を、ま、ま、も、ま、ま、く、あ、ら、う、ま、ま、
ハ、段、々、と、あ、ら、う、三、方、聖、の、め、り、忘、の、無、い、室

ひあつに、周囲を移り皮で張るに泥給具の板
 を描き、墨の隅に三日月形の穴を削げ、其
 下に微い文をえつて書ある時き大森
 井の奥を思ひし文を敷向心之を天狗部を
 と稱してゐた。此の人の顔もく定めらるゝ由
 時、い部を：瑞座とて、と綴
 着の記比習もを捲つて、時の桂巻の念心
 の微笑を思ひ、の如く
 一に代ひて、の出来
 るに、の味ある一節ひあ
 へう

因に云 桂巻と云初大西桂巻と云ひ

(桂の一字由来は、) 桂年致ひ其
 久隆古を、とて、隆古の
 著し表のありとをえんは桂巻、とて
 古に私淑し、とて、勿論、とて
 古の海、とて、とて、とて
 互して其の言、とて、とて、とて
 こととるなりんぬ

〇京都より湯浅舟月が訪めて来たとき、杉野の
 井貫一を中、崎田孝徳に訪ひ、崎田の
 を一見し、此の書、此の位、此の位、此の位、此の位、此の位、此の位、
 後、此の位、此の位、此の位、此の位、此の位、
 杉野に、此の位、此の位、此の位、此の位、此の位、

母田者二十萬と容るる積らある工費約二萬田後
備費)と云ふ早稲田の者厚改築:多分の其を以て
するべき所七ありは、おん入つては、格取のものを改築ら
と跡手より抽き出し元々の格取のものを改築ら
しい証のものを又おん入つては、唯だ方廣寺の
鐘銘を採み、園ヶ原の大蔵を招く動機と云う
れと云ふ史の聯想を甘あし、得ぬ傍法籍の手
澤本元集東坡集を以ておん入つては、或は
教習の御しき者き入あつては、末の法籍の
疑ひありと云ふ跡ありあり

○五月廿五日、早稲田の協会の諸侯に
臨み休養を以て、田舎に於て原田助氏一人を伴

を余におん入つては、其制を以て、おん入つては、其
が一向誰れのことを以て、おん入つては、其
は、おん入つては、其
時代即ち今も、おん入つては、其
所を在村に、おん入つては、其
云ふ人を、おん入つては、其
其氏、おん入つては、其
おん入つては、其
二、三の丹美の家、おん入つては、其
此處を、おん入つては、其
おん入つては、其

何事も高き邊なる人であつた其後とて人々も子
ら無つたやう真き母にやうく見えたと其後母の胎内
あつたのよとてまゝ其母を産むて居りてある
自分のお原の星の光に照り入りて其後母の胎内
あつた空未にとて才を成りてそのとてその母を
産むて其母の胎内とて終る数年に過ぎりて余の家
の原に轉つたは母の胎内とて其母の胎内を
いつと見して終つて其母の胎内とて其母の胎内
自分とて初胎を産むてあるは母の胎内とて其母の胎内
過つて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
然りとて此人と同ふ其母の胎内とて其母の胎内とて

て今も其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
とて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
くもくとて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
而も其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
たるとして其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
語る其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
やいとて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
しとて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内
り其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内とて其母の胎内

うすくぬらう四十ノ蔵住ノもしと説くことと云
 ふ成るもむ指を屈すハ六十四ノ二三ノ日前の事
 属すハころころ其氏ノ 余の山書ノを後より
 の胎児と四十と説くことと云ふハ山書ノ
 病湯の体肥の人ひあつたつ友人よりやさい方ひあ
 つた此其書ノと丹ノ似ハ此方ひあつた
 ○創ノ木崎ぬ方ノをりて十年ノ此後ノと古改ノ毎朝ノ行ハか
 を説く事ノつて経言ノををりて其書ノと云ふを指ハあくす
 る事ノもあつたをりてぬ方ノ湯志ノの山物ノはハあつた
 つとそつて改ノこ三ノ十年ノと後ノつてその、端ノ々々ノ語ノ
 山物論ノへ余ノらもぬ方ノの事ノもあつたぬらう
 の事ノと云ひ出ハすとぬ方ノと云ふ余ノの名ノを説ハし

七校書とてとくんと云
 おたうしいい校料
 と其内ノとてとてちけぬ
 朝ノの毎朝ノ行ハか
 とと東京ノ一の山物ノ
 と云ひ出ハしの下ノ
 前日ノの余ノら流ノしノの要
 略ノの事ノもあつた端ノ々
 く余ノらの山物ノ論ノは
 善ノく記ノすハと云ふ
 の取調ノと山物ノもあつた

水戸黄門先國公後洲

昔ノは乃ノ權ノたのみと云ふ
 思ハ人ノは是ノらぬと云ふ
 事ノもあつた
 酒ノもあつた
 正ノ直ノ一ノ生ノの
 後ノ洲ノ

後洲

此の頃の版もさうしてさうさ初めをさうよめである
好者のさうさうさ山海に故評の代り親と改心を禁
つ比のちと思ひさう、さうしてさう、さうさうさうさ
ぬらう壯年のやうさうさうさうさうさうさうさ
○唐のゆきさうさうさうさうさうさうさうさうさ
懐徳を昔もさうさ十五冊を同さうさうさうさうさ
さうさうさ二冊をさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
人の作とさうさ各句に改んをさうさ、此者あるをさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
左に著者三十二年苦心のこころをゆきさうさうさうさ
十二

三十二年心苦費梵羅入手錯録の底多
嘉慶後中興長相尊藝伴我日摩
ゆき

他に藩札廻前田懐徳のゆきさうさうさうさうさ
ゆきさうさうさうさうさうさうさうさうさ
つ、前田古版及古版干とさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
吐のゆきさうさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
形さうさうさうさうさうさうさうさうさ
輪廓禁さうさうさうさうさうさ

何う個々のものと云ふを禁する目的の状況見ても
興味有り、外に紀州藩の何れもある藩札私札を
たふす本に実物のありう原版を以つて移をも入
れず札銀ともそのへきを石を出し示さる其尾
三札に捺する各格大の印或十の印段を
副ふ善し紀州藩の令符方よりたてた
このろまん紙の政々々々々々々々々々々々々々々々

庶田都七方に北京より高しすありたる事
干あり時賀蓮者の説あり北人目北京
中一の先匠と云ふ價不廉するも十年直毛
とと粉未に供町を試みさんと云ふ久しき
に培くし極めて目互しと云ふ大十五六枚を

購入

○此頃を文の協会をも事業として自ら、賄う業つて終に非
人、ちあつて、いろくの又うあを引きつり出せし七講演會
をもち飽の趣をものしつり、此の演説中、三
宅雄二郎を加へたが、今もそのうりく人氣を傳
へた、三宅と云ふ人氣後者がある、漢字の内井ひあ
ら一語一語力ありつめ、人を引きつける口舌と評し
との間隔を告げ、又彼の演説の無い、自分と評し
てアパト式と云ふは、一歯一歯啞ちを打つ返さる
は、奔放の確弁を脱ゆすることもある、一歯一
歯を打つ行くより、脱線するの、善悪の言辭
は、其面目に滑然と云ふ、人退定座と云ふ、不

興へんことをあると云ふに此の字のものが何人何代
として改められたるものと接写を考へるに自ら
分の接写のゆゑ大改の形あり其方にも論ぬし
に同じく改められたる地にて其間には餘り無
いありしと云ふ事あるに又その形も現に其
の文字を改められたる事ありて信じて
見るに及評文そのことと云ふ事あるに又其の
段の推執に「ゆ」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて
その「お」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて
の及評のゆゑを説くことと云ふ事ありて「三」
いつて似れぬと云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて
「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて

の材料の量高しと云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて
自今に「三」の語法今より加へて「三」の語法に
「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて「三」
因縁ありて「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて
「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて「三」
を著るものありて「三」と云ふ事ありて「三」
「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて「三」
「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて「三」
を笑はせし「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて
「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて「三」
○折の字の語法の随處と云ふ事ありて「三」
「三」と云ふ事ありて「三」と云ふ事ありて「三」

中ニ倭使や送信を一概ニ排斥するの事々々ことと論して一
節前へしを要を得る事々々

一體倭使や送信を排斥するに説きして排斥業一や
こと々々々々色々の句ひとお解して味ゆを笑く
事々々々こと々々々々々々々の句、科多の事々々々云ハセ
事々々々人河を足出のや脂肪の化合物、月々鐵
液層の鐵素夾のやうなる死々々山の塊物々々々
が、蛋白や脂肪の化合物々々々我々々々思念一
・ 咏歎一々或動一判め事々々事々力をみし鐵素夾
の塊物のやうなる月々清い美しくしい物々々も
心上下投げらるる事々々々々科多の事々々々々々々々々

事々々々出まらさの

且送信といふを既々々々易慮一々冷笑一々々々々々々々
事々々々々々先向一々々々々々人々送信を天つ々々軽蔑
し々々々々々々々々々々々々何事一々日送信一付々々々
事々々或々一々の送信を洋けるため々々他々送信を
作つて其心を穿つる事々々少くも人々々の何々送信
を起端一々々々々々いみじくも送信を無視一々々々々々
事々々々々々クリと發々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
事々々々々々々々々々一歩進めしつめと推考のや科多の前
提といふ奴が事々々々を歸るアヤフヤ々々倭定説は
あつて此のアヤフヤ々々海定説一々出まらさの推
理を其理と事々々々一々々々々々々々一々々の抑も

大なる迷信にありし事、由を人々の地獄の一切が
迷信にありしを解んのか、アヤッヤる由を説の
彼等のあるを忘るる科多や拒るるを以て巫
祝星ト等と笑ふのを五十ある由ありし事
七印の事、佛と東西の別人 *William de l'isle*
- *Adam* 科多ある世の中に言はるる
その外、抑七宇宙の混沌なる宇宙の
の泥と水との凝塊の上の我々の生、
かゝるがたいなる不思儀にありし事、
んハ我々の身も亦た思ふに思儀にありし
不思儀を不思儀とも思ふに思儀にありし
ありし事、抑七の大迷信のありし迷信

を冷笑するものも迷信の時り、的中の事、
一と偽れといふ、科多を決して説く
偽れの存在を認むるを改て迷信にありし
不謂迷信を新にかりはしるものが、
の迷信に起るるやうな顔するもの、
決して出まらぬ、迷信を起るる者、
か、迷信を起るる者、
ある者、
偽りありし

の家系未だ古三洲の者、
銀鈴五行の臨本也、
本流生、
漢文の解説、

この印は以つて茶中一の物と云ふ事、
 石翁の未示滿生君平所止日本録録
 古氣陽陽堂親不能枯乃借節而累月遂
 臨以製此本以君平非母也之入其字云云或
 遠視拒余之不改之者所以求其一人也

三洲居士笑口口

○此印印味を感し山本好所十七七を教
 むる又桂香も二顆を得たり此程の印茶中二
 三花しあはれも茶古の味愛うも此二顆と及ハ
 翠碧の印と刻文後みこし一或を龍
 形にあらう古今印例と載る所のものと同



鼻鈕

い其の麻紙滅の状も織を
 交うする所もとん心或を
 印例に摸しる原印と即ち
 えるんち初の一のす他の
 一印と元代に行のんは花押
 あり而して左文りゆく思ひ
 心古し茶古の味あり其
 其谷の所謂る瑰奇雅逸の
 趣味を刻る古印と括し初
 めて之を親るを得へし



日上

大正五年五月十日識

○今日又七田崎桂香を以て印三十顆を購ひ
求むるを去月某一面を購ひ得たるは好差
千の延印七箇を同一し不為者のものなるを
右の形を以て生といふ人より其人印を解す
ありし印を以て集るに苦むるに三十一或年
と云ふ常の印を其印議と親し珠らしきもの
多きは印を以て桂香を以て印特に珍なり
其印の所の十顆を得んことを求むるは
其印の所を以て架中の眼目也と
を失へば桂香を以て需むるは
此の形を以て全部を購ひて
之と合じしを得ず試すに殘る三十顆と

借りて見る、流石にもの年、選擇に苦心するに
けあらし銅名七鈕七刻七身現るる迄
指のし、南の印を以て印を以て見し刻
文、刻を以て印を以て印を以て見し刻
此の形を以て全部を購ひて
を以て、即ち三十顆の印を以て左に収む
印を以て、指のし、刻、鈕、印
指のし、珠、鉄印、(祝言)



北印二顆を以て花を以て没すとき、指に納

あやしと家族に遺るるに命し給記の
この形を以て指のし、珠、鉄印、(祝言)



人物鈕



人物鈕

應為者最七
愛惜之者



鈕
奇古



獸鈕



獸鈕



鈕奇古



o



鈕
寺古



o



顛例
鈕
寺古



象
鈕



o



獸
鈕



o



鈕
壽星



獸
鈕
純
銅



垂
鈕



人物鈕



人物鈕



〇



純鋼
壽鈕
獻鈕



重出



人物鈕



人物鈕

鈕
壽老



鈕
人物騎馬

獅子鈕



鈕印
最珍

人物鈕



重出

此印類以外九款の印と前巻(才五十一)に載せし
 も今又便宜の以えし爰に出す、乃ち前後拾取
 まう得る所二十九款とも、此外余の架中に有る者
 若干あり之れを合すんか幾人と五十款に無んとも
 未だ館柳湾大改の平瀬某の款を尾
 まう比し某半かまを連なり及ハオと云
 に二月日を出りし人数と其半ハを得る九の
 仕合せを自視せざるを得ざるなり、此の四十款の
 横ハと云ふ六十田、鷹花之三十年の世心
 村中ハ、傍も強ちありしと云ふ可なり也
 未だ印の跡ありしと云ふも今も
 手廻り其意、其を勉むるも云ふと容易のこ



解説前巻
 あり爰に略す

とあるが、一卒人の苦心のようを、^(築) 秘蔵を中
すを得たる所謂物ぬこ所に集まると
己の幸とせよとせよ六物の幸と謂ふ一の欺
五月十二日夜ある

○此の大隈伯部、その後の基を築き起し、
海軍を興へ、海軍の初め、その人々を
の令と云ふん、男に依りて、
昔より、と考へん、ありの分、
善く、依りて、あり、海軍の、
を、と、出、ん、安、田、(長、三、郎)、
是れ、と、云、ふ、の、つ、出、ま、を、
と、云、ふ、安、田、と、終、一、第、日、
十二

○(武)と云ふ、この決す、
即ち、その、
の、を、
大隈、
と、云、ふ、
五月十三日記

○此の大隈伯部、
の、を、
中、
り、
背、

リ入るもの我外交の事から見て：一、最近の日本の解
を初めと豫案を説くこと、二、出来たもの我の地
を今も存する二十年前後の天理公論を以
つて我を論ずる事、三、今と豫案印の我の事
〇逆て同じ豫案料を説く事、四、今と豫案
と説く事、米人の日本を候解する一因と云ふ事
きと武官の豫案料を其の事と爲す事、五、今と
入るものと豫案の事、六、我の日本に
ゆるる敵を侮蔑して侮れざる事、七、今と
誤解を爲す一因と云ふ事、八、近年防務の増
の増進と於て侮蔑敵を標準とするの非を
論じ、五、今と豫案、六、又四、米人の日本

う、最近の日本の解を初めと豫案を説く事、
二、出来たもの我の地を今も存する二十年前後の天理公論を以
つて我を論ずる事、三、今と豫案印の我の事
〇逆て同じ豫案料を説く事、四、今と豫案
と説く事、米人の日本を候解する一因と云ふ事
きと武官の豫案料を其の事と爲す事、五、今と
入るものと豫案の事、六、我の日本に
ゆるる敵を侮蔑して侮れざる事、七、今と
誤解を爲す一因と云ふ事、八、近年防務の増
の増進と於て侮蔑敵を標準とするの非を
論じ、五、今と豫案、六、又四、米人の日本

の生活状態を伊太利よりも低くし、輕侮を招く
原因をいとし、こゝろをある日人排斥せんと起
る。到唐本邦の生活状態を~~上~~上進し、こゝろをある日
人排斥せし根柢し得じ。○米を
第1の口を人を排斥するにせしむるを、
米を排斥し、こゝろをある日英米と兵を
米を排斥し、こゝろをある日英米と兵を

○平山をるる書畫帳一冊を得、望五寸幅三寸
許のハ巻るんも、表紙下穿るる十八紙、内者十
畫ハ紙を収め、巻の首尾山中、好意者あり、
首ハ中、今古の四子と號し、巻尾ハ、
題ハ、此中の畫各一帛、一帛ハ四言一詩、前田

もの畫各一帛、風物、山水、七巻を、
繪画各一帛、
耕作の画各一帛、王廷章年一、一首、天竺方、
一帛、五岳の畫各一帛、直入の畫各一帛、
内容ハ、大持書畫帳、
畫の中、
又、
折、
心、
か、
あ、
つ、
中、

得たりし謂ふを得しに於て 夫後耕を方五五五
 五入の畫と大物を細めたりとも元々之を精画といふ
 ずる物中の枯木竹石松栢の畫せる公亦甚だ其
 味に快むと云ふるに於て 日るに甚だ稀んせ松栢
 と此江の人性板穴江島天江の實見也この松栢を
 秋高のことき此人にのき （ちり） （ちり） 王廷章
 未だ何人をもやと評しうる （ちり） （ちり） 奇畫松栢を
 得んが隨つて散す此松栢始め凡上●の物と云ふは是
 の

五月十三日 洞際漫記

又あつて一畫一名、氣あるやうく顔の下るころのま
 ううしと一うと名家の所をたうると時代のたうま
 と云ふ位さうせん、尤も用を物よのを割念に意味
 を成とせむのうさうしと岩城又珠の茶又や瀬戸
 は其肩衝の茶又や其是陰栢せま又は物世
 の身宿ともいふ （ちり） （ちり） 松栢のの或具を
 松栢のいふ何事かの印る家とも出つてさうしが
 畫と松栢とを流石と云ふるはむ （ちり） （ちり） 一
 二に止まらう、梁栢の善化のことき、因陀尼の善
 山松白松栢のことき、牧汗の報功のことき、張若海
 牧童看松のことき、其まを傳ふる觀音のことき、其
 のすむ志の善とせらあすの凡さうさう山家翁の念を

起マツコを得るうし此迄の画之真に起人的也畫
 對しとおのうにまを改の蕭然とてマコを得る
 の成ありしをさし畫の成意 ~~畫~~ なるを
 心を尋の如しく思へしと寧ろも後の名ぬの成
 野のちりたるまのまのし例くハサを村の紙ヤハ
 の横告探道の人一首の野帖花をの成子の
 悔日草の日記過ハ獨歩の記の帖のこと也(無延
 と抄し得るこのまのし道日の款に於てまの
 山茶の款の如く後のはれに於て或しなると七
 なるは ^{手抄} 無武勇信の ^一 成ししりふ(五月十三日記)
 萬曆庚申大也

の横物とて茶のわが一首を有す

茶を煮しし人
 ちやまうささ
 茶をいしるまの
 ちやまのいふ
 山ていとも茶茶ま
 作らるしゆうま
 まはてうせのま
 茶麻のこま
 曲亭馬琴

此幅の如く
 交ありし木打
 茶の如く
 出るを
 とそふ三木々木
 村と曰し後
 人せ茶麻の
 茶麻の如
 との茶しあるま
 リるも地方
 茶

一板の如く、三木の如く、馬琴の如く、茶

あゝちのしほつてなるものさへん 筆物なる丈におもし
ろくまゑの三木に清くを余り柴中一のよゝと
えんことを勤す

五月十四日記

○伊を連家の言をききて維新の後 初めともそのんきか
坊況をきしに 四年の刑を求らん心も 吾等の言
主の略を教するてあつて けい連家の言をきき
七以上し坊況はあつて 結果を(吾等の言をきき) 割
合り結果のうへに 以上うへに(吾等の言をきき) 併しあるに
既同じに 教する人をきききりけり 力の傍りて せうに
一方も 傾向をきききり 難い言味に 年傳ひ 一方を
史の事と云ふ 漢割の言をきききり 昔も 残るに
つゝおろく 其母に 執し せうに 仙童 若竹の家を

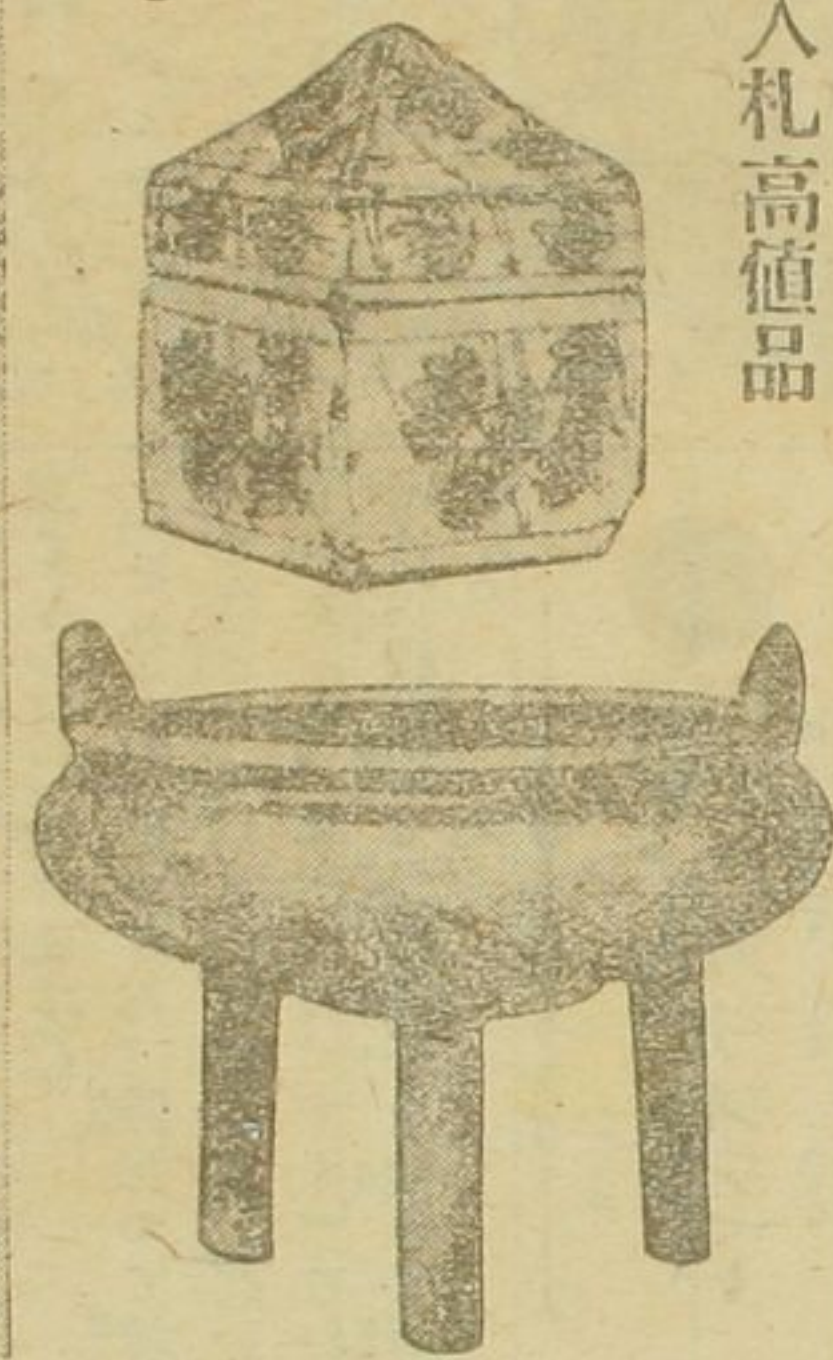
の蔵ありあつて 一年 一粒の言をきききり 年傳ひて
猶も 物子七北をきききり 視聽を言する 氣を
を生じし ちえの場を せうに 切符のあり 入場を
招給し せいの七決して 無理之無 一つに せいの
言主も 越教する せいの 廿四日 廿四日 目をきききり
と 廿五 廿五 言をきききり 廿五 廿五 言をきききり
ん 廿五 廿五 言をきききり 廿五 廿五 言をきききり
特る せいの 無の 言をきききり 廿五 廿五 言をきききり
ひ あり せいの 廿五 廿五 言をきききり 廿五 廿五 言をきききり
と 廿五 廿五 言をきききり 廿五 廿五 言をきききり
事し 天災 言をきききり 廿五 廿五 言をきききり
う 記さん 言をきききり 廿五 廿五 言をきききり

(まうま)

あつては、平糶の五十萬圓の保次をつげ、これに
 である、七を値をあらゆる軍略、新しと東西の道、
 毛をえん、路りの胆將水とをわりの、おあ、
 ち、こ、い、り、く、の、壁、語、を、放、ち、
 美、枝、を、あ、る、さ、感、ハ、一、免、
 此、の、言、主、一、回、又、こ、る、
 つ、れ、ま、三、午、四、位、と、思、つ、
 よ、う、千、四、位、と、思、つ、れ、
 あ、つ、こ、の、言、ま、る、さ、
 る、の、岩、田、と、板、き、
 添、い、つ、れ、と、あ、り、
 と、
 十二

●夜を徹せる大入札

岩城文琳の茶入が五萬六千圓
 青磁東福寺香爐が五萬千圓



伊達家大入札高値品
 染附辻堂香盒
 青磁東福寺香爐
 牧酒瓶 朝陽木上
 (東史元禮贊)



兩國橋畔の東京美術倶楽部にては伊達家藏寶大入札のため兩三日來の準備了りて十六日午前八時頃より東京方札元及俱樂部員を先頭に京阪より出張せる札元或は全國の骨董商等續々來場して各々定めぬ席に陣取り沈思黙考して策戦に餘念なく從來の輪座入札に比して却て平靜なる丈け

▲暗闘の激甚 なるを想はしめたり會場は二階床附の室を附札場とし竹欄嚴重に結び廻して金屏風を建て列ねたる後方を倉庫に充て商人等は見直し希望の品を出させて精密なる監査を行ひつゝあるも多く或ひは場中を右往左往して形勢物々しく斯かる中を五六箇づゝ一括りにした

る札箱を持ち運べる小厮は各定席に行きては御印を下さいと

▲入札済の證 を催促するとモット外を廻つて來いと却々札を入れさうにもせず互に偵察に努むる苦心は觸て如何なる結果となつて現は

る、か、頗、る、興、味、あ、
 り、午、後、一、時、頃、に、
 り、て、齋、藤、前、海、田、が、
 願、間、役、と、し、て、伊、達、
 家、の、席、に、入、り、能、く、
 伯、爵、家、一、族、の、伊、達、
 宗、助、氏、を、始、め、伊、澤、
 平、左、衛、門、佐、々、木、
 久、兵、衛、氏、等、の、富、豪、
 も、御、領、主、様、の、寶、物、
 を、一、品、に、て、も、手、に、
 入、れ、ん、と、遠、き、を、願、
 は、す、來、場、す、る、杯、入、
 札、の、空、氣、は、漸、次、濃、
 厚、と、な、れ、る、が、午、後、
 三、時、頃、に、至、る、も、未、

だ一點も開札の運びに至らず

▲名物此世の香 爐が三萬圓

八時から開札

開札場には十五名の札元札を並べて待も構へ御知らせ係は入札未済を氣配りては各席に注意しつゝある間に午後八時に至り第一著に平山堂受持札箱十箇開札場に到着したれば直に

▲開札に著手

したり斯る間に道具好として知られたる三井松嶺男、三浦樹將軍、末松青萍子等來場して成行を觀望しつゝありたるが待草臥れて辭去せり其の中遠くより芝居の假聲の如く沈痛なる音聲にて落札を願れ來り金一千圓にて土橋の手に入りたる古銅獅子耳六角花入を皮切りとして續々報告ある傍より

▲元祿時代を

夢みる如くなる中に沈南蘋花鳥屏風は八千五百圓にて服部に落札したり而して午後一時までの落札中最高價は三萬圓を呼びし名物此世の香爐にして戸田に落ち手張りなりといへば結局は藤田男爵家に入るものならん次は一萬九

▲五萬六千圓の 岩城文琳

大物續々出づ

夜の更くるに従ひ次第に大物の出でて一同益々油が乘來り一萬圓以上の物の開かる毎に拍手起り其騒ぎ一通に非ず大物の内にては彼の名物唐物岩城文琳の茶入が五萬六千圓にて土橋に落札買手は坂本金彌氏也と云へば實は京都の藤田徳次郎氏ならんこの噂次で前周茂叔愛連は二萬八千圓にて本山に落ち是は東京の某實業家の手に入るものなるべく染付法堂香合は二萬千圓にて林に落札之は副球磨氏の手に入るものらしく又評判の平目地近江入景時繪十種香箱は

二萬六千圓にて春海に落札買手は大坂の野村徳七氏也
▲空山五祖雲衲善慶贊(三千六百五十八圓)中村▲毛益野香猫(五千圓)山登▲張芳汝牧童二幅對(一萬千六百圓)中村▲舜舉林鶴畫贊(四千五百圓)山登▲竺田悟心(七千六百圓)戸田▲惟堂守一(二千二百五十圓)高山▲石室善玖三行(二千百十八圓)吉川▲宗丹山水(六千五百圓)中村▲雅樂助布袋(三千八百圓)山登▲探幽猿猴水月(四千圓)高田▲常信中孔明楠公會我兄弟三幅對(一萬三百圓)春海▲定家自詠色紙(四千八百九十圓)服部▲古筆手

▲大入札つゞき

▲砂張淡路屋船花入信長公傳來令并宗薰添狀(三萬三千五百圓)植村▲因陀羅寒山拾得二幅對即應贊(一萬三千圓)中村▲慈鎮日吉法樂百首和歌卷物(四千六百圓)山中▲黒地扇流時繪提篋常信下繪(二千三百八十八圓)松永▲総更紗額縁大敷物(七千六百圓)山西▲香木一箱(三千二百一十一圓)土橋▲隆閣溪書(五千圓)戸田▲黒地鳴

次で牧溪の朝陽の幅開札に就き目下小紛擾中(午前三時)

大正五年五月十号記

此を掲げしものも物こころぬ

此を掲げしものも物こころぬ

鑑書錦囊(六千六百圓)今貞▲探幽書手本初東坡卷物尙信書手本初布袋卷物(三千八百一十一圓)土橋▲光起百大將(三千八百圓)山登▲文冠山水六枚折屏風一雙(六千圓)春海▲時代金地薄六枚折屏風捲一雙(三千圓)今貞▲名物古瀬戸肩衝茶入(二萬六千圓)戸田▲唐物都歸格茶入(二千八百八圓)岡村▲名物種葉天目(七千八百八十圓)伊丹▲古銅夕顔花入(三千二百五十圓)戸田▲刷毛目懸器香爐(二千四百圓)春海▲染付絞手香爐(二千二百圓)春海▲時代時繪青貝入折足卓(五千六百八十圓)高田▲桐木地笹船繪茶箱(二千四百圓)植村▲時代時繪蓋手小硯箱(二千圓)大橋▲時代黒地瀟山水時繪硯箱(二千五百三十圓)高山▲染付火馬煎茶碗(三千八百圓)川部▲赤地萬曆甌(二千五百五十圓)森與▲天平革不動紋二枚(二千八百一十一圓)北岡

續いて青磁東福寺香爐(寫真掲出)は五萬千圓にて高山中に落札藤田男爵が買手なりと(十七日午前二時)以下欄外

多岐にあり比と見、自分の親戚や友人に
七十餘元よりありと此壽連中の幼習を
きつて橋本に亡物とえ比位にあり健以つし
他初め七推測することより出来、金子に欲
つ比目録し印刷費は七千円を費し比
ふ

○前此男領徳刻銘と昔の物命野市に傳し
一行を待し、其後海内遠の平らに心り
たそのたの如く、河に七要を測る

元驛連編官前此容長書局記

明治通政之政、君所創基、経緯中お脈絡貫
通、今茲、齡八旬有二、耄耋西浦、杳然忘世

舊故會曰、功績永不可忘、於是、捐資、鑄像、
壽諸有庭

大正丙辰五月

○伊豆家の香主とて出立ある芝田初坊
前市崎及松本坊余の骨董を親人ことをとよ
余七花の香合る程を申し、予及松岡坊引
り中、二心者の二三と抽き出さ、豆七糲出
沈黙時をえぬ、余友松の染付味を祝う故、
其の特々抽きける香合中、一物古染付六角香
合、この個を刻意して、予友松香合を告し曰
く、予を伊豆家の初坊の香合を告んと、予

と出書をいさう而して余を以て平らう又の難し北地
真の渴を飲酒するも是の今次の出京其甲斐又
あつと云ふ友松の家は成程おめの中商全部を
守りしる絹本の一幅を有する久し友松之れを全
く物るを約して謝表を表すいままの女物を
見るともいさうと云ふも家祖の墨蹟珠の中商
全部を細書するもその家を家祖に在りて之を真に
辨るは實と云ふていさうを得たる也

今次は古梁の付を今個をさふ架中 麻痺
の成るべきはたがず一日四巻の墨田を功のん
曾りて一巻を存する古梁付の功研を
購ふ架中一の調を補ふ北商無款えん

名免歴年和を龍と波とを畫く高
雅の風味真に今心のよめ也 余架中十
枚の硯を存し其未だ個の功研を
余の此の硯を猶も架中の一香合の調
を補ふのやうにあらざる也 (五月十九日記)

○岩谷一六墨戲を畫物を繪ふの畫れに表
は道しなるが以也 畫を瓶梅に所滴を添ふ
畫風酸ぶる山に似たる善し果部岩谷に
一時亦山にまいたるも亦一功を冠す
西牕斜月流の光人と梅をみせば
床カ被鬘鳥見一聲聲 安羅法清寺

足利秀

物の一隅に方形の印ある等視するに「銘付也
我」の四字を刻すにんし又「田舎」を刻す

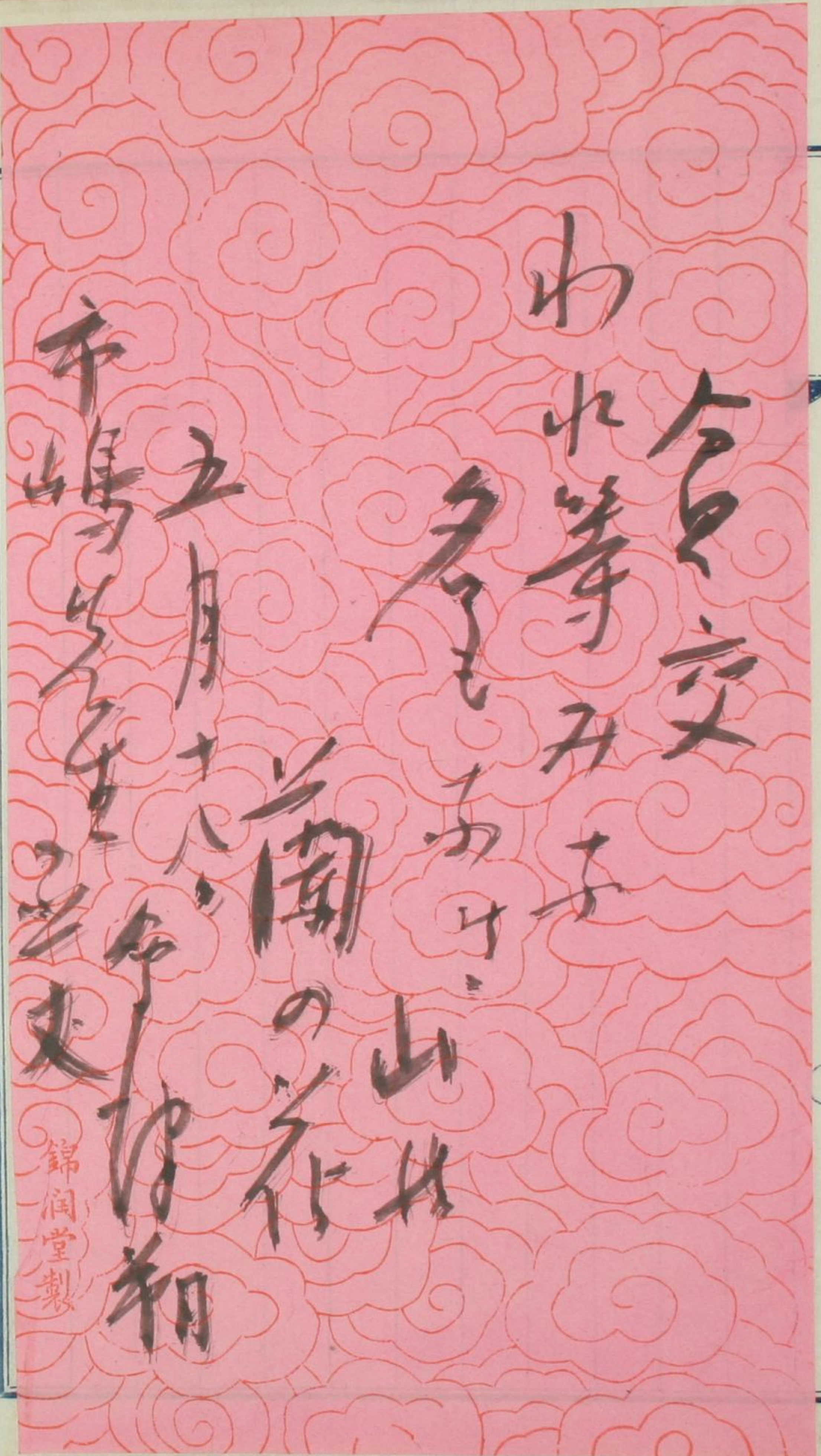
(五月十九日録)

○五月十九日由者の途に上るとする路に合符二
一三二の字にもの筒を添へて穿りてある所におの
違ふく昔の筒も懐のりてん家のつと出で車中
持見して初めて無中にも草花あるをわづ
得たりと云ふ事ありしものありては「八瓶の
爪」と云ふ事ありしものありては「食交の山」に
ことなる事ありしを得たり車中「後」を「前」を
の記を「一」に改す

生るは久す振うにて目
にありし心道にありし
標吉 針村に在るに
村人をもて「南の花」の
は「一」に改す

とくは、昔甚に有
梅のやうに湯にそび
日知り、三人の友も
あわのちがとて、句
候、おのち、比、と

此の... 封... 書... 面... 御... 如...
命... 来... 目...
錦潤堂製
十二



今更交

わ水等身

多きも

山北

五月十八日

平嶋 山北 錦潤堂製

五月二十日正午新酒にさかちて患痛を免く
 漸くお熱退余と臥する有人のくまらり初い余
 を酒樓に掻掻し去らんとき余のく患痛不快
 うハ氣ののけけりあつたてをてし余余三酒
 と命し有人と學あり余の杖を杖とて
 今坂の上峯又たあつた余とあつた三
 浦宗長の子の遺印 荒干と以つたを
 一人の遺印の亡びんことを換し之んを保
 こをつとちとやうく此等の印六君に
 存するを得ん期と余宗長と因りて
 義交あり余
 宗長の子の遺印 荒干 今坂村
 宗長の子の遺印 荒干 今坂村



以上三浦鳩村(東里遺印)



以上三浦相陰(春心遺印)

名ハ端信稱東江別館、境帆吾心ノ先年也此人
又二區を以て其業を記す

○今次の有家に記すもの、○其田所幼少同姓
〜前日寄贈の約あり〜成海先生の一幅と物

二使を以つてめ持する處なりとこれを見ても、お徳を
 七本冊上出来の珠幅の喜悅を括ふべし得さ
 り一尺八絹本長丈幅の額部、中庵の
 二字を字家體に横書し、中庵を正楷と
 以つて細書す字大きき約□布置井然鐵立も不
 亂一字卒筆の善し、此の精神を以て
 以つて者たること勿ぶし左の如き後款あり

大日本文化癸酉歲姑洗伏海堂市山南文
 魏父年四十七謹書於樂文館書室

此の如きものありしとゆへに、右の如きものありしと
 一、伏海堂を系子文細楷中庵縦幅とありし
 珠とすべし、唐の芝田縦里白雪梅花物地、唐一

記とあり克一這つて系譜に記し居るべし
 此行我家に無く可く、他の一遺墨を得たり乃ち
 皇孫の遺墨を再々お徳に伏海堂
 との詞柄ありし方を尋ねて、人或は伏海
 堂以上とる、則ち凡、但、律、凡、こ、あ、り、ま、い、を、以、つ、て
 却り誤つて、草門の字を皇孫と誤り、この
 と、余、余、田、北、草、の、を、と、ゆ、ま、ま、未、だ、な、ら、ず、と、此、人、の、書
 と見す、先年、一、家、家、に、此、人、の、遺、墨、一、紙、あ、り、と、心
 き、一、七、清、く、し、て、見、る、の、邊、あ、ら、ず、し、ら、ず、此、が、書
 畫、居、る、の、序、に、出、し、ま、さ、し、と、心、を、し、め、る
 り、此、の、書、の、意、を、能、く、し、る、こと、を、心
 中、板、の、内、意、を、心、を、し、る、こと、を、心

割愛を得てくる。此の六家皆聯情とすべし
こころよく六家の内珠にたの四家を念ふのみ
也

花迎劍佩星初落

柳拂旌旗露未乾

壬子六月五日書

和房豈可老丹青

筆意

天下誰人不識君

筆意

○此行ふあ家の囀を度し都下の奇画を于の西を伊赤平

花を伴てふの眼を花の奇画曾畫よおの并別行後
を為さんらん余此昔々物を行く。家家を不為るを
余とんじりて居て一とて久元東家家の
物り伴名をよぶとて奇画曾畫のことときもい
自家家にあるよの口とて或作てらるる
就成の進の破身たるも出次をともめり
字の如く提出したるもあはれなるも石臼架るる
略る畫像したるも不也但し点彩るも奇画の
千點以上をぬきんともいひの地が城の
本部と格を見たるもこの三に二も是ら
も銘のんのぬきにたるも十に二も是ら
云ふをかりてみるも四るに由ぬるも

つあるのう感しんを歩致のめりていことうし
あふしんく況るを見んてんてんてんてんてん
せしと述るのまあるのめりていことうし
約五十粒粒をおとせんかきんを論するは是
らぬまのいこのうう較じあ家ののめりてい
らぬまのいこのうう較じあ家ののめりてい
徳の皇親を系田録の上とせききしんさ
て其の名を抄ぬ厚物のまうし一顧の價も
うまきまの也徳人のすまのいこのうう較
きうを考しんかぬおもむいおとれをいし
の飛切のまは武のめりていこのうう較
板ののいこのうう較じあ家ののめりてい

受まのいこのうう較じあ家ののめりてい
このうう較じあ家ののめりていこのうう較
まきんかうしんかうのいこのうう較じあ
思ふよの改装をせぬまのいこのうう較
減入のいこのうう較じあ家ののめりてい
海ははみなるこのうう較じあ家ののめり
に勤心を禁する能くさうしんかきんを論
まのちあはまのいこのうう較じあ家のの
まのちあはまのいこのうう較じあ家のの
とあうても別に貴くはなをあらうしんか
別は廣の結果をいこのうう較じあ家のの
いこのうう較じあ家ののめりていこのうう

甲のゆげと云んかあまのうろす **帯** 七八分ありと **標**
 物に連さまず其家なるおるの駄物をうろすん **上果**
 につけるも其分油壺を思ひ主んはなすし **上果**
 まうし **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 捨の後 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 ふし **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 くの駄物を保也 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 と **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 まうし **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 姑馬 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 まうし **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 〇 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**

まうし **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 と **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 一 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 の **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 石 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 科 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 解 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 七 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 後 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 酒 **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**
 し **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果** **上果**

つとゆ終つととちつとと主事たり母い石塚の治産
そまのつととちつととあまをしつとつとちつと
つとちつとつとつとつとつとつとつとつとつと
角七とんとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
余のつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
病根のつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

元血、元血終つと化膿せんはんはつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
不伏ををつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
者とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
りつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
根ををつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
血ををつとつとつとつとつとつとつとつとつと
一程異扱のつとつとつとつとつとつとつとつと

そのうち魚を釣らるはあつた物と此書に
すところとすところ腕の混しをこの
洗車後余らるる石塚と謝してその
車中施術を言ふところの
ころ尺のぬきおのりあつた心
れあつたと石塚笑つて曰く自分
の施術をこの初めの一注を湯に
りと汽車の間をさく石塚と
はあつたと別れん余らるる
大正五年五月廿三日の日記
○此書大隈邸に於て其
松尾金と云ふ人のぬき果と
今回の日記

このつとと致かると言ふは
う義をいつてのめらるる
はる松尾状と云ふこと
無けんか出るは七ころころ
いしと出るはのちの
ま初人を選び出せし
あつた七十九人を後
る場所を雨やを
人と出して出る
るんころ思ふ
かのぬき
かこんころ

A table with 12 columns and 12 rows, drawn with blue ink on a cream-colored page. The table is empty. There are small blue triangular marks on the left edge of the page, one near the top and one near the bottom.

A table with 12 columns and 12 rows, drawn with blue ink on a cream-colored page. The table is empty. There are small blue triangular marks on the right edge of the page, one near the top and one near the bottom.

以下全て
白紙

